

し訳ない」との自責の念に耐えず、覚悟の自決であつたろう。少尉の死に対し、隊長、同輩、部下は大変悲しんでおられたという。

この少尉の死を見て、あるいは流言飛語の飛ぶ中で、山中に入って最後の抵抗をと、筆者も思ったというが、当時、あの環境の中では、ほとんどの者が、抗戦・自決を一度は考えたと思う。

終戦後の抑留生活、特に、中国においては、好意的な待遇であつた。終戦翌年、鹿児島に上陸・復員・帰郷したというが、当時の年令、十六歳から二十三歳まで、青春時代を軍隊で過ごした体験は、恐らく、終生忘れ得ぬ体験であり、この体験こそが、敗戦後の日本を現代の平和日本に仕上げたと思う。

忘れ得ぬ飛行兵の思い出

愛媛県 保田基一

忘れ得ぬ昭和十六（一九四一）年十二月八日未明に、真珠湾攻撃で大東亜戦争の口火が、きられた。当時、私は旧制愛媛県立吉田工業学校の電気科三年の時であつた。

毎日毎日、海軍航空隊の戦果が勇ましく報道され、ハワイ真珠湾からマレー沖海戦ではイギリスの超弩級ちやうどきゅうの東洋艦隊の戦艦を二隻撃沈するなど、こんな威力ある海軍航空隊の軍人とは、どんな人たちかと少年期の私は非常に関心をもち、飛行機乗りを熱望するようになった。

ちょうどその頃、町役場に海軍甲種飛行予科練習生募集のポスターがあつたのを思い出し、早速調べた。その結果、中学校四年一学期終了程度の学力が基準とのことで、後の半年間で学科を勉強

することとして、当時若者の憧れた、陸士、海兵、甲飛等の問題集を勉強した。しかし難しく、難儀しながら何回でも挑戦してやろうと決心した。そして昭和十七年八月に学校に内緒で、成績証明書代わりに通知簿持参で願書を出し、すべるのが恥ずかしいので、このことは誰にも言わなかった。

試験は毎日、午前と午後に科目のテストがあり、合格者のみが次の試験を受けられた。三日間の一次試験の合格者には後日、佐世保鎮守府より二次試験の受験が許され、二次試験は昭和十七年九月に佐世保海軍航空隊で実施され、不合格者は、その都度帰されるということで、その間十日間ぐらいかかった。合格通知は九月、愛媛県庁前集合で発表されたが、何と南予では大州中学の渡辺享、宇和島中学の宮本大、そして吉田工業の私の三人で、合格者の少ないのに驚いた。

昭和十七年十月、三重海軍航空隊に入隊、開隊中で寝具や吊り床もバラバラの状態で、新品の寝

具も堅く、訓練も大変だった。服装整理、隊内見学を終え、海軍四等水兵の着馴れないジョンベラを着用し新兵教育が始まった。

十一月に勅令改正で一等飛行兵となり、七つボタンの予科練服で訓練に励んだが、やがて適性飛行訓練が鈴鹿航空隊で行われ、初めて飛行服を着て三式初級練習機に教員と同乗し、初めて操縦桿を握った。教員から右旋回、左旋回の指示を受けたが、夢中の空中感覚に酔っていた。

海軍というところはおかしいもので、人相、手相、骨相などを調べて操縦、偵察等に分けて訓練する。私は水上機操縦と決まり、分隊の編成替えで、陸上機約一五〇人、水上機一〇〇人、偵察三五〇人に分かれ専属的な訓練になった。

昭和十八年五月二十七日の海軍記念日に、甲飛第一期生六〇〇人が威風堂々と大阪の湊町から軍楽隊の軍艦マーチで梅田の大阪駅まで行進したのが印象に残っている。

昭和十八年六月、艦務実習が行われ、「陸奥」

「長門」「扶桑」「山城」の四戦艦に分かれて乗艦することになった。私たち水上機分隊は「陸奥」乗艦となっていたが、昭和十八年六月八日、戦艦「陸奥」の原因不明の謎の爆沈で予定変更となった。しかも土浦航空隊第十一期生の一個分隊が乗艦しており、全員犠牲になった。予科練の教程で最も悲惨な事故であった。私たちの運命的な巡り合せを感じた。

その後、十日間の休暇を貰ったが、大雨の連続で帰隊できなくなり、二日遅れで帰隊したために高橋俊作副長（「月月火水木金金」の歌の作詞者）がカンカンに怒った。

十一期生は、昭和十八年に仮装行列や運動会、武技、体技等に特に優秀な成績を残し十一月に卒業した。そして第三十五期飛行術練習生となり、陸操は鹿児島出水空、水操は博多空と北浦空、偵察は鈴鹿と大井空に分かれて訓練を受けた。私も茨城の北浦空へ赴任した。赴任の途中に宮城と靖国神社に参拝し、自分もいつか祀られると、しみ

じみ感じ、先輩たちのご冥福を心を込めて祈った。

北浦空は、筑波下ろしの寒風で、まさに身を切る寒さである。その中で、九三式中練機で離水、着水訓練を繰り返し、単独飛行の腕前を我ながら嬉しく喜んだものだ。その後、特殊飛行や編隊飛行、計器飛行などを習得し、いよいよ実用機教程となり、初めて長距離飛行で中練機を大津空まで空輸した。途中で愛知県知多半島の河和空で燃料を補給し、懐かしい鈴鹿の上空を飛んだ。途中で安井君の飛行機がエンジン不調で木曾川に不時着したが、旨く不時着したので褒められていた。

実施部隊の回顧

実用機訓練も完了し、昭和十九年五月、いよいよ実施部隊へ転属、同期七人は香川県詫間空に操縦教員として着任し、甲飛第十三期、飛練第三十八期生の指導をした。この詫間空には大型飛行艇も離着水するため大変混雑し、航空管制もなく、

吹き流しを上げている程度で、日頃の勤が左右する訓練であった。

昭和十九年には岩本練習生、松井教員、北村練習生、予備学生三人、教官一人、野口教員等が殉職し、昭和十九年七月には、佐伯空の西条中学の吉野和生君が対潜哨戒・索敵で戦死、水操分隊機長伊藤雪雄君も戦死した。

いざ決戦に

昭和十九年一月、「神雷部隊」第七二一海軍航空隊が開隊された。この部隊は、戦局を挽回する作戦部隊で、人間ロケット爆弾「桜花」を主戦兵器とした特別攻撃の専門部隊であった。全国の練習航空隊の教員や戦地実戦部隊より「桜花」搭乗員を集めたもので、詫間空からは、甲飛第十二期の吉田稔君と私が行くこととなり、別れに司令より短冊を貰った。

その短冊には、惜別の詩が書いてあった。

『神のます琴平山の松風に

声うちそぶる空の神兵』
とあった。

横浜まで二式大艇で送られるという破格の待遇であった。特攻隊員を出さざるを得ない苦衷の配慮だったと思う。

茨城県神ノ池航空基地がこの「桜花」の操縦訓練の基地で、最初は零戦を使い、エンジンを止めた状態で標的を狙い急降下で着陸する訓練を繰り返し行い、桜花練習機での着陸する技術を身に付けた。

高度三〇〇メートルより零戦のフルパワーで緩降下し突入する技術も養った。最終は海軍の一式陸上攻撃機の胴体下に着装した「桜花練習機K（ケーワン）」に搭乗する。しかしその投下訓練も1回しかなく、二回目は本番の特攻攻撃である敵艦突入である。

この機は胴体に翼と操縦桿にフラップだけの簡単な機で、やり直しはできない。操縦の要領は高度三五〇〇メートルぐらいで一式陸攻機より切り

離され、機首を下げたまま二五〇ノット（時速四六三キロ）で引き起こし、そのまま滑空に入り、神ノ池第二飛行場の地点を目指してフラップを下ろし、一一〇ノット（時速二〇三キロ）で地上メートルの水平飛行の上、接地・着陸する。エンジンがないので、静かで速力があり、舵はよく効くので、すぐに操縦の要領を会得した。

昭和二十年一月、南九州地区へ進出して行ったが、全員戦死するので、後続の搭乗員を訓練するために、基幹員として甲飛第十三期生、飛練第三十八期生の中練教程卒業者を零戦搭乗員として、複座の訓練機の後部座席で教員となって訓練に従事した。その部隊は「龍巻部隊、七二二空」の名称とした。

昭和二十年三月十八日、九州沖航空戦が始まり、桜花直援の戦闘機隊である戦闘三〇五・三〇六・三〇七が、この重なる空戦で喪失が激しく、第一回目の桜花特攻作戦には三〇機しか随行でき

ず、また桜花の母機である十八機の一式陸攻は、多数の敵戦闘機の待ち伏せに会い、無念にも敵空母群まで到着せずして全滅し、零戦一〇機も失った。

全滅の憂き目に会った神雷部隊、桜花部隊は、新型の零戦五二型に五〇〇キロ（五〇番）爆弾を装着して体当たり攻撃を桜花攻撃と一緒にやることになった。

「桜花」の編隊攻撃を単機の奇襲攻撃に変更し、沖繩方面の菊水作戦として（一号〜十号）続いた。「龍巻部隊の教員達」も第二次進出として四月十四日に鹿屋基地に移動した。その日も一式陸攻七機、桜花爆撃隊六機を見送り、十六日には桜花攻撃機五機と桜花爆撃機九機を見送った。

特攻隊員としての記録

昭和二十年四月十八日、忘れもしない爆戦特攻の搭乗割りが私に下った。三十分後に司令部前に整列という。いよいよ行く番がきた。肌着と褌を

新品に替え、今までの着衣は庭で一斗缶にて焼却し、私物は遺品とし、あらかじめ書いて置いた遺書と遺髪、遺爪を副官部に提出した。短い三十分間であった。司令部前に整列し五航艦の幹部からは次々と激励の訓示があり、美辞麗句というか何か煽てられているような気がした。本日は山本五十六元帥の命日で、仇討ち攻撃だと言われ、私も元帥と同じ命日になるのか、いいなと思った。

士官用の湯飲みで別離の杯を飲む。チャート(航空図)に敵艦の位置を書き込み、股の記録盤に挟んだ。迎えのトラックに乘ろうとした時、同郷の十七志丙飛の木村君に会った。

「保田さん、征くんですか、何か言い残すことはありませんか」と言ったので、私は「今日、今から爆戦で突っ込んでくる。もう遺品は副官部に提出したから何も無いが、元気で出発したと伝えてや、さようなら」と言っておトラックに乗った。いつまでも彼は不動の姿勢を崩さず、真剣な目な差して敬礼をしたまま送ってくれた。その後、彼

も一式陸攻の主操縦員として「菊水十号作戦」の特攻出撃をし、戦死した。

出撃の整列線に向かい搭乗機に手を掛け上がる時、ふと思わずもうこの地上を踏むことはないのだと、二度、三度と足踏みをして爆撃機上に乗り込んだ。操縦席の私に整備員が近寄り「零戦と違って爆弾投下把柄がありますから、いざの時、これを引くと爆弾が落ちます」と説明してくれた。敵戦闘機に襲撃を受けた時には爆弾を落とし、身軽な状態で反転して戦うつもりであった。

いざ出発という時、指揮所の方で発煙筒の煙が上がる。何の合図かと思うまもなく伝令がきて「発進中止、爆弾を直ちに掩体壕えんたいごうにしまえ」という。そこで整備員の誘導で滑走路と反対側の方向に行き、壕の近くでエンジンを切った。

後での説明では、攻撃目標上空にはグラマン、コルセアなどの敵戦闘機がいっぱいで、群雀のようにいる。もし出発して攻撃すれば全滅し、効果なしと判断したらしい、という。その敵機が、ま

もなく南九州を荒らし廻った。

四月二十二日、私たちは、鹿屋では危険であると宮崎県富高基地（日向市）に移動し、次の出撃のために待機した。

連日、攻撃命令がでる。その都度、次の攻撃隊が指名され、鹿屋より桜花部隊が特攻出撃した。六月二十二日、「第十号菊水作戦」という大規模な沖繩作戦は終了した。その後、いよいよ七月一日、本土決戦の警戒が発令され、桜花隊員は石川県小松基地に移動し、待機したまま終戦となった。

【解説】

〔甲飛第十一期生の概要〕

入 隊 昭和十八年十月一日

入隊者数 一、一九一人

戦死 七三三人（死亡率 六

一％）

配属部隊 土浦海軍航空隊 五八五人

三重海軍航空隊 六〇六人

飛行練習生 第三十五期

操縦専修者（出水空、北浦空、博多空）

偵察専修者（鈴鹿空、大井空）

飛行練習生 第三十六期

操縦専修者（大村空、名古屋空）

偵察専修者（徳島空、上海空）

甲飛第十一期生の死亡率は六一％に達している。

この太平洋戦争の最中に入隊、それまで先輩の古参の空の強者が、前半戦に失われた後を補うように訓練を受けた。しかも太平洋戦争における後半期の激戦の中に投入され、文字通り身をもって皇国の防波堤とならんと気概を唱えつつ、その多くの者は空は勿論、翼のない海の特攻などにまで、その失われた防波堤の中に埋没されている。

体験記筆者も、昭和二十年には、「神雷部隊」の「桜花」特別攻撃の訓練を受けている。

「桜花」はロケット人間爆弾である。高度三、五〇〇メートルで母機から切り離され、約九秒間ロケットが噴射し、あとはグライダーのように敵艦に体当たりする兵器であった。

最初の桜花特別攻撃隊（神雷部隊）の隊長であった野中五郎・海軍少佐は、この「桜花」を「この槍、つかい難し」と喝破した、という。

もちろん野中海軍少佐は、自分が桜花に乗るのではなくて、母機で桜花十五機を運ぶ陸攻隊の指揮官であったが、昭和二十年三月二十一日、最初の攻撃後、今後の使用を止めるよう遺言している、という。軍の中でも極めて悲愴な兵器であったことが伺える。

この「桜花」は約八五〇機が製造され、全体の戦果は駆逐艦一隻の撃沈であったという。

また母機となった陸攻は、海軍の陸上攻撃機

で、これには二機種あって、中国本土攻撃で活躍した中攻（九六式陸攻）と太平洋戦争の主役であった一式陸攻である。

この一式陸攻は主翼を燃料タンクにして、積めるだけの燃料を積んだものであった。そのため九六陸攻よりも全長が三メートル長いだけであったが、機銃や爆弾、魚雷を積み、最大速度は四五〇キロと速いものであった。中攻は約千機、一式陸攻は約二千四百機製造されたという。

この陸攻が、胴体に「桜花」を吊り下げて、敵艦が見えるところまで運んで行く。そしてこの陸攻一機には七、八人が搭乗している。

先に述べた野口少佐の指揮した最初の桜花特攻だけで、桜花十五人、母機の陸攻、援護の戦闘機の被害を入れて、戦死者数は一六〇人に及んだという。あたり永年の教育訓練を経た多数の実戦パイロットが、一回の攻撃で、一瞬に失われたのである。

海戦において空母一隻を失った陰にも、帰還してきた飛行機を収容できないで、数百人の実戦パイロットの喪失があったことが指摘されているが、この大戦におけるパイロット不足を招いた主因は、このような大量のパイロット喪失が背景にあったものと思う。

そしてそれを補うために、学徒動員による海軍予備学生、予科練、少年・年少兵が動員され、投入されたのである。